



News Letter

2021/12

日本医療安全学会事務局

〒431-3192 静岡県浜松市東区半田山1丁目20-1 浜松医科大学総合人間科学基礎研究棟306号室

<http://www.jpscs.org/> Email: office@jpscs.org TEL:053-433-3812 FAX:053-435-2236

目次

- 01 世界患者安全の日 (World Patient Safety Day: WPSD) における活動報告
- 05 委員会、部会活動報告：学術委員会、ピアサポート部会
- 07 一般社団法人医療対話支援連携プロジェクト Heals 研修会のご案内
- 08 第11回 日本医療コンフリクト・マネージメント学会のご案内
- 10 編集後記

世界患者安全の日 2021

(World Patient Safety Day: WPSD 2021) における活動報告

医療安全学会 広報委員会

委員 新田 雅彦

編集委員会では WPSD における施設における取り組みを募集し、山梨大学医学部附属病院と大阪医科大学薬科大学病院の2施設より報告を受けました。各施設からの取り組みをご報告します。2021年のWPSDの活動テーマは、「妊産婦と新生児の安全なケア (Safe maternal and newborn care)」で、それぞれの施設でテーマに即した魅力的な活動が行われていました。

1. 山梨大学医学部附属病院

山梨大学医学部附属病院では、2019年の第1回から活動に参加しており、第3回となる今年も参加しました。医療の質・安全管理部が主催し、山梨県及び山梨周産期医療懇話会の後援を受け5つの活動を行いました。

1) ポスター作成・掲示 (図1)

オリジナルのポスターを作成し、当院のほか活動に賛同が得られた県内医療機関(14件)に掲示。

2) パンフレットの作成、配布 (図2)

パンフレットを500部作成し、9月17日に当院医事課会計窓口のほか、県下の医療機関で希望者に配布。

3) 病院スタッフ等によるオレンジ色マスクの着用 (写真1)

活動に賛同が得られた県下の医療者約 600 名がオレンジ色のマスクを着用して本キャンペーンをアピール。

4) TV 等を通じた広報活動

テレビ山梨 (UTY) の当日のニュースでの放映や、附属病院 HP での活動紹介。

5) テーマカラーのオレンジ色でのライトアップ (写真2)

山梨県庁舎、駅前の信玄公像、甲府駅前広場において、テーマカラーであるオレンジ色のライトアップを実施。



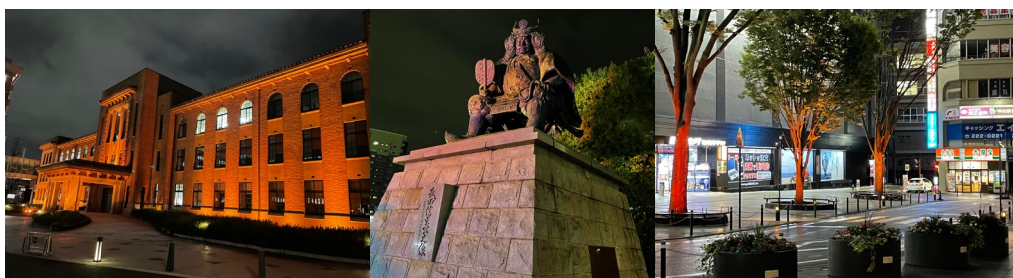
(図1 山梨大学医学部附属病院 オリジナルポスター)



(図2 山梨大学医学部附属病院 パンフレット)



(写真1 山梨大学医学部附属病院 オレンジマスク着用した職員)



(写真2 ライトアップされた 山梨県庁、武田信玄像、甲府駅前広場)

2. 大阪医科薬科大学病院

大阪医科薬科大学病院は、今年から WPSD の活動に参加しました。医療安全推進室が主導し、看護部、産科・新生児科・小児科、事務部門を中心に協力を受け実施しました。また、今回、初めての活動ですので、院内の職員への WPSD の周知、医療安全に対する意識の向上を目的とし 4 つの活動を行いました。

1) 病院玄関等にシンボルカラーでアレンジされたお花を設置、院内にポスターの掲示 (図 3)

WPSD の週にあたる 9 月 13 日 (月) から 18 日 (土) まで、病院正面玄関、6 号館 (産科・小児科病棟) 1 階出入り口にオレンジ色でアレンジされたお花を設置。また、院内の各部署にポスターを掲示。

2) 病院スタッフ等によるオレンジ色マスクの着用 (写真 3)

9 月 17 日 (金) に産科・新生児科・小児科のスタッフ、外来診療スタッフを中心に、オレンジ色のマスクを着用 (学内 1,400 枚配布)。

3) 医療安全研修会の実施 (図 4)

職員を対象に、WHO の取り組みや当院産科・新生児科の取り組みについてハイブリッド研修会が開催され、現地 30 名、オンラインからは 253 名が参加しました。

4) 病院・大学 HP による広報

詳しくは、下記の HP をご参照ください。

- ・ 9 月 14 日掲載：「世界患者安全の日」の啓発活動の一環として、お花が飾られました

<https://www.ompu.ac.jp/news/of2vmg000000fbs7.html>

- ・ 9 月 17 日掲載：9 月 17 日は世界患者安全の日です

<https://www.ompu.ac.jp/news/of2vmg000000fp5m.html>



(図3 イベントポスターと病院玄関、6号館入口)



(写真3 大阪医科薬科大学病院 オレンジマスク着用した職員)



(図4 大阪医科薬科大学病院での研修会)

厚生労働省のHPでは様々な団体の取り組みが報告されています。

https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_18576.html

来年は会員の施設から新たな参画を期待します。

委員会・部会活動報告

学術委員会

学術委員会委員長

渋谷 健司

大磯学会長のもと新体制となった日本医療安全学会の学術委員会は、各部長に加えて、新進気鋭の若手のアカデミアを中心に、多様なメンバーで構成されている。新型コロナ禍においては、従来の医療安全からより複雑で多面的な医療安全への関心が、社会的にも高まっている。そうした中で、新体制の学術委員会においては、透明性を担保し意見を出し合い、本学会の学術的な価値の向上とともに社会的な貢献も重視していくことが確認された。さらに、他学会との連携の強化、さらには学術総会学会賞の基準を明確にし、特に若手奨励などを重視しながら、学会の裾野を広げ、多様性を重視した学術的活動を促進していく。すでに、国際診療部会および看護部会では、来年度2～3月にシンポジウムでの開催を準備している。また、来年6月開催予定の第8回学術総会に関して、学術委員会部会を通して、積極的に演題の募集とシンポジウムの開催を行い、大磯学会長の最初の学会の大きな成功につなげたい。

ピアサポート部会

ピアサポート部会部会長

和田 仁孝

傷ついた医療事故当事者へのケア

日本医療安全学会ピアサポート部会では、医療事故に直面し傷ついた医療へのサポートをテーマに、その仕組みとあり方についての検討を進めています。

医療有害事象が発生したとき、患者遺族はもちろん、事故に直面した医療者も深く傷つき苦悩することになります。誰も事故を起こそうと思って起こすものではない以上、また、患者さんのために医療に従事している以上、何かが起こったとき、医療者も深く傷つくのは当然です。多くの医療者は、抑鬱状態に陥り、何度も事故の様子がフラッシュバックするなど、いわゆるトラウマを抱え込むことになり、体調に影響がでる場合もあります。医療者としての自信も喪われ、現場に戻れず、なかには自罰意識が昂じて自殺に至るケースもあります。

事故に直面した医療者は、深く傷つき混乱する中で、周囲の視線や言葉にも敏感に反応し、しばしば非難のニュアンスや、疎外感を感じ、いっそう傷ついていくこともあります。どのように見守り、声をかけ、あるいは支援をしていくのか、周囲の医療者も、日常からそうした知識を身につけておく必要があります。事故後に、患者家族の悲嘆と心理状態に適切に対応していくことの重要性は、メディエーションの

モデルなどを通じ、これまでも強調されてきました。それとまったく同等のケアとサポートが、事故当事者の医療者にも必要です。

事故に関わった医療者には、法的責任（刑事・民事・行政）や、医局からの離脱、失職など、追い打ちをかけるように様々なサンクションが課されていきます。それに対し、支援のシステムは、我が国ではまだまだ未成熟といわざるを得ません。アメリカなど海外では、医療有害事象に直面した医療者を、Second Victim（第2の被害者）として位置づけ、その救済のためのシステムを構築していく動きが定着しています。様々なモデルがありますが、共通しているのは、院内でファーストエイドとしてのサポートを同僚が提供していく形でシステム化されている点です。必要があればより専門的な臨床心理的ケアや専門的ケアへとつなぐ役割も果たしますが、それ以前に仲間（ピア）として、その話を共感的に受止め聞いて行く事が中心になります。苦悩の語りを聴くことこそが、その苦悩への共感を生むことになります。

事故に直面した医療者は、上司には話しにくい、場合によっては自分の属する部署の同僚には話しにくい、あるいは逆に部署の仲間こそ聞いて欲しいなど、多様なニーズを持っています。ピアサポートシステムとは、こうした多様なニーズに応答できるように、予めピアサポーターのリストを用意しておき、その中から当事者が自分で話す相手を選択できる体制を整える事を意味します。相談を受けたピアサポーターは、そこで聴いた話の内容は、上司や管理部はもちろん、ピアサポーターの仲間にも開示せず、完全に秘密を守ります。それゆえ、事故に直面した当事者は心置きなく苦悩を聞いてもらうことが出来るわけです。ピアサポートシステムは、通常の病院の組織システムからは、そういう意味で独立したシステムとして構成されることになります。

また、自身が勤務した病院内では、サポートを得にくいという物理的・心理的障壁が強い場合——これには、病院の中にそうした文化やシステムは根付いていないという場合のほか、システムとしては存在しても、日常的な人間関係の在り方に問題がある場合などもあり得ます——、病院組織から独立した組織が対応できるような体制の構築も必要です。そのため、Heals という組織を、私自身立ち上げていますが、たとえば学会なども、そうした受け皿の一つとしての禍の王政を有しているように思います。

私は、医療有害事象発生時の患者家族へのケアと、事故に関わった医療者へのケアは、つながったひとつの支援であるべきだと考えています。患者家族への誠実で適切なケアがなされ、遺族の想いへの応答がなされた場合、その遺族は医療者にも「これを機会によい医療者になって多くの患者さんを救ってあげてください」といった言葉が掛けられる例もあります。この遺族からの言葉こそ、自責と苦悩にさいなまれる医療者にとって、もっとも救いになるのではないのでしょうか。この患者家族と医療者をつなぐ過程の一環としてピアサポートを考えています。

また、システムとしてのピアサポートだけでなく、ピアサポートの姿勢は、いつ仲間が、あるいは自信が事故に関わるかも知れない医療現場で働く全てのスタッフにとっても、実は必須の姿勢であると思います。医療機関へのピアサポートシステムの導入だけでなく、個々の医療者の方々にもピアサポートの姿勢や考え方を普及することが必要です。次に掲載しますように、そうした観点からの医療者へ向けてのピアサポート研修も提供されており、今後一層の普及が望まれるところです。

一般社団法人医療対話支援連携プロジェクト
Heals 研修会のご案内



開催日時: 2022 年 1 月 30 日 ~ 3 月 27 日

各 13 時 ~ 16 時

	開催日	テーマ 講師
第 1 回	1 月 30 日(日)	導入「日本の医療の現状/コミュニケーションと傾聴」 講師: 和田仁孝・永尾るみ子
第 2 回	2 月 13 日(日)	概要「ピアサポートを学ぶ」 講師: 井上真智子
第 3 回	2 月 27 日(日)	法的サポート「医療事故後の法的側面」 講師: 神田知江美・五十嵐実保子
第 4 回	3 月 13 日(日)	精神的サポート「事故当事者の心情と拠り所」 講師: 吉益晴夫・川谷弘子
第 5 回	3 月 27 日(日)	ロールプレイ「当事者支援のための実践的ロールプレイ」 講師: 和田仁孝・永尾るみ子・川谷弘子

・申し込み: 右記 QR コードから必要事項を入力してください

・受講費: **2,000** 円/回 (5 回参加の場合は 10,000 円)

・締め切り: 2022 年 1 月 7 日 (金)

但し各回定員 **100** 名になり次第締め切り

・講師: Heals メンバー及び協力者

※単会での受講も可能です。5 回全て受講された方には修了証をお送りします

※日本医療メディエーター協会会員の方は各回 10 ポイントが付与されます

お問い合わせ先 <http://heals.jpn.org/index.html>



第11回 日本医療コンフリクト・マネジメント学会のご案内

日本医療コンフリクト・マネジメント学会 第11回学術大会

大会テーマ 対話のアート
ーポストコロナ時代の不易流行ー

プログラム

特別講演 飛田伊都子(滋慶医療科学大学院大学)
「対話の機能」

シンポジウム

診断エラーに関わるコンフリクトは何だろうか？
千葉医療ADRからの学び

特別企画

The ART Jam

山梨ゆかりのアーティストが4名登壇予定



大会長 荒神 裕之
(山梨大学医学部附属病院
医療の質・安全管理部)

会期

2022年1月23日(日) オンライン開催

オンデマンド配信期間 1月30日(日)まで

参加
登録

第11回学術大会HP
<https://supportoffice.jp/jshcm2022/>



第11回日本医療コンフリクト・マネジメント学会学術大会 参加登録・運営事務局
(有限会社ビジョンブリッジ内) TEL:03-5229-6881, E-mail: cf2022@supportoffice.jp

運営準備室 山梨大学医学部附属病院 医療の質・安全管理部 担当 五味 咲也華
〒409-3898 山梨県中央市下河原1110, Tel: 055-273-1111(内線 3525), E-mail: sayakag@yamanashi.ac.jp

第11回日本医療コンフリクト・マネジメント学会学術大会を2022（令和4）年1月23日（日）にオンラインで開催致します。当初、2日間の日程で山梨県甲府市での現地開催を模索致しましたが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の第5波に見舞われ、オミクロン株の流行が懸念されるなど、現地開催が難しい見通しとなりオンライン開催としました。メインテーマは「対話のアートーポストコロナ時代の不易流行ー」です。アート（Art）は、芸術と訳され、絵画、音楽、伝統芸能など、様々イメージが湧く言葉ですが、物事を成し遂げたり、創り上げたりする際のスキル（術）であったり、科学的な視点のみの学びに馴染まない感覚的な学び、例えば歴史や言語などの意味も含まれており、広くは人間性や直観といった意味も包含しています。本大会は、このような広い意味のアートを踏まえて、「対話のアート」に関して学び考える場を目指します。山梨ゆかりのアーティスト4名にご登壇頂くなど、これまでになくオンライン学術大会を目指します。医療安全に携わる多くの皆様のご参加をお待ちしております！（参加申し込み等の詳細はポスターをご参照ください。）

編集後記

2021年はコロナとの共存の始まりの年でもありました。第5波が始まる一方、感染症と戦いながら東京オリンピックが開催され、多くの国民に感動をもたらしました。

医療現場においても、医療者はリスクを背負いながら、如何に安全な医療を提供する術を模索し続けています。コロナの時代、人と人との関わりが分断されるが故、“対話”の重要性に気づかれる今日この頃です。

「世界患者安全の日における活動報告」では、スローガンを用いてワールドワイドに“対話”し繋がりをもつ取り組みを紹介しました。「委員会、部会報告」では学術委員会より学会員や他学会との“対話”、またピアサポート部会より傷ついた患者家族や遺族、そして医療者との“対話”についての意気込みを紹介いただきました。また「学会案内」では日本医療コンフリクト・マネジメント学会学術集会を紹介しており、“対話”のアートがテーマとされています。

2022年は壬寅年です。2022年は、厳しい冬を越えて、芽吹き始め、新しい成長の礎となる年になりますよう、“対話”を重視して取り組んで行きたいと思えます。

編集委員 新田雅彦、永尾るみ子、紀平浩幸